文武館建設の舞台裏

嘉永五年の旅は「物見遊山」か「教育研修」か？

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長　安岡　明
facebook

「嘉永五年の旅」の新しい解釈について！

●「中村市史」に樋口真吉が父と共に勤務した幡多奉行所について興味ある記事があった。「元禄二年（1689）中村藩三万石は廃絶になり、この凶報が八月十四日丁度不破八幡宮大祭の宵宮の日に到着し、大祭も中止、中村は大騒動になった」と記述にある。それ以来中村に武士階級は激減したらしい。一時は幕府の直轄地として扱われたが、土佐藩に編入され、土佐藩は中村に幡多奉行所を置き統治を開始した。幡多奉行所は現在の幡多事務所に警察と裁判所が一体になった組織にみえる。

●幡多奉行所の箇所には、左の図と共に奉行所内の各役割の解説がある。真吉の役割は「郡下役」であったはずで現代の庶務課長だと書いてあるが違和感がある。郡奉行の隣の部屋だとわかる。

「銀米方」通常三名居て経理事務を担当する。

「郷廻り」は、現在の巡査から刑事、巡査部長に当たる。約十人程いて管轄下を巡回し、庄屋をはじめ一般庶民の善悪を糾す監督権を持っていた。「御免方」は八人程いて税務署員のような事務を担当したという。「御普請方」は組頭級で五人居て土木担当だという。

「御山方」は林業の担当だとか。その他下代や使い番、給仕などの職務があり多岐に渡る職務をこなしていたらしい。そして興味ある記述にであった。奉行は上士であるからその身分は別格で、外出するにも権威ある格式があったそうで「下に下に」という先ぶれをして馬か籠に乗って供を連れて外出したという。これでは奉行は気軽には外出は出来なかったであろうと想像される。

●「嘉永五年の旅」

この記述が頭の隅にあって、真吉が嘉永五年五名の青年を引率して長崎から江戸までの長期の旅に出る記述の中に「五月十一日幡多奉行をはじめ、後に勤皇活動に挺身した多数の門弟たちによって船で佐田まで見送りを受けて出発。」と書かれていたのである。何気なく読み飛ばそうとしたが、「幡多奉行までが佐田まで真吉一行の旅立ちを見送りに来た」ことが疑問になった。現在は佐田の沈下橋には市内から車で十分もあれば行ける。しかし、当時は徒歩であり、まして奉行が行くなら供ぞろいでの見送りである。疑問点はまだある。佐々木高行（上士当時二十二歳）が大坂から真吉一行の旅に加わっている。佐々木高行は上士であり、しかも年齢が真吉よりも十五歳も若い。彼がこの旅に参加した意味が理解できずにいた。真吉と佐々木高行が以前から知り合いだとは思えない。まだ疑問点があるのは江戸本郷に剣術道場を

「中村市史」

郡奉行所役宅配置図

御免方
使番
郷廻り
銀米方
郡下役
奉行
御留書
玄関
御山方
N

— 554 —

嘉永五年壬生漫遊日記の旅は「物見遊山の旅」か「教育研修の旅」か？

西暦	真吉の日記表題	旅程	目的地	目的	剣術	砲術	情報	国学	備考	面談人物	同行者
1852～53年	壬生漫遊日記 嘉永5年	301日	岡藩	交流	◎				岡藩で御前試合	千葉栄太郎	山崎文三郎
			長崎	西洋砲術の情報収集		●	●		高島流砲術の情報を得る	高島浅次郎・大木藤十郎・ジョン万次郎	遠近晋八 桑原介馬 安岡東二郎
			福岡	亀井学派の書籍の筆写				●	亀井塾へ遠近晋八と安岡東二郎を紹介	亀井暘洲	寺田忠次
			萩	交流	◎				萩藩士と交流	木島又兵衛	
			大坂						佐々木三四郎と大坂で合流し江戸へ		佐々木三四郎
			江戸	佐久間象山塾入門	◎	●			西洋砲術塾入門	佐久間象山	石山孫六
1854年											
1855年	文武館完成										

持つ石山孫六が、土佐藩に招聘されていたが江戸に帰ると言う。その剣客石山孫六をわざわざ中村に呼んで、共に中村発長崎経由江戸までの長期の旅に同行させている事である。疑問点はもう一つある。同行の石山孫六の旅費は別としても、三百日に及ぶ六名分の旅費のみならず亀井塾の費用や佐久間象山塾の費用などを考えるとこの長期旅行には膨大な費用を掛けている事になる。この費用はどのように工面したのであろうかの疑問である。

長期旅行の真相

●何故佐々木高行が？

文武館は嘉永六年の二年後に完成しているから、嘉永五年のこの時期には恐らく藩校建設の内諾が藩庁からあったのであろう。文武館開校の準備が急務になり、とりわけ学問の講師陣の育成が気になるので恐らく真吉は幡多奉行と入念に計画を練り、講師陣養成の総仕上げを目論んだ十カ月に及ぶ教育研修計画書を纏め上げたのだ。多額の費用が見込まれるので、当然費用を藩庁へ願い出たはずである。土佐藩はそれを認めたのだ。その証には大坂から佐々木高行がこの旅に参加しているが、検分役としての参加であったと考えると全てが説明が付く。

●何故石山孫六か？

次に石山孫六を同行させた理由は真吉日記を克明に分析された森本邦生氏の論文（平成二十三年八月発表）の中にヒントがあった。江戸滞在の費用を考えると土佐藩邸に宿に求めるのが合理的に見えるが、石山孫六の道場に滞在することで、剣の修行には事欠かない環境が得られるのである。他流派の剣客たちも他流試合にやってくるし、真吉達も他流試合に出かけている。剣術道場に滞在することは実に好都合だったのである。事実十月六日江戸到着以来連日剣の稽古に明け暮れている記録があった。（下記資料参照）

石山孫六は後に土佐藩士になり、高知に赴任しており土佐藩との縁は深い人物だったのだ。

●何故幡多奉行が？

「中村市史」によれば、嘉永五年五月十一日幡多奉行をはじめ多数の門弟たちに見送られ、一行は佐田から船で渡川を出発したとあるから、間違いなくこの研修旅行は幡多奉行所挙げての大事業であったことを示している。

一方「真吉日記」では、「この旅の目的は久しぶりに宮部の大石道場を訪ねるほか、各地で武術他流試合や、各地の文人との交流であった。」とあるが、これは少なくとも真実では無い。以上の考察から嘉永五年の旅は幡多奉行と真吉によって綿密に計画された文武館講師養成の教育ツアーだったと断言していい。

併せて真吉にとっては西洋砲術の最新情報を収集する目的も持った旅であった。

●「真吉流の教育計画」

では真吉が精緻に計画した内容を見てみよう。

★講師養成候補者に、遠山晋八、安岡東五郎、山崎文三郎、桑原介馬の四名を抜擢した。

★実習地に「長崎」と「江戸」を選び、その道中を武者修行に充てる計画としたのだ。

真吉が二十一歳ではじめて見聞して感銘した長崎の原体験をこの青年たちにも共有させたい思いが根底にあったはずである。同時にあらゆる情報が集まる江戸もはずせない。真吉のそんな思いを凝縮して計画したのがこの旅であったと思われる。

★共に旅をすることは長期合宿と同じで若い人材に文武両道の実践教育をする狙いがあった。昼は共に歩き、他流試合をし、夜は同じ宿で寝食を共にするので、真吉は夜間も講義も出来る。真吉は大いに時世を語り、藩校に賭ける夢も語ったであろう。旅こそ真吉流の講師養成法だったと考えられるのである。

★真吉の精緻な性格も手伝って、見事なまでにこの旅の記録が残されていることもこの旅が気楽な物見遊山の旅でなく詳細な報告を必要とした旅であったことを証明している。

●廻国経路は以下の通りで青色の宿場で他流試合をしている。

中村（5/11）→宇和島→佐賀関→鶴崎→府内→岡→宮部大石家（6/4）→熊本→島原→長崎→大村→武雄→小城→佐嘉→柳河→久留米→小倉→長府→吉田→萩→山口→徳山→岩国→広島→大坂→京→大津→津→伊勢→名古屋→吉田→濱松→箱根→江戸石山孫六方（10/6）→江戸出発（1/27）→鎌倉→箱根→大津→奈良→吉野→大坂→丸亀→内子→大洲→中村（3/6）（この資料は森本邦生氏の論文から参照）

●遠山晋八と安岡東五郎の二人を博多で亀井塾に入塾させ二十日間ほど学ばせている間、真吉たちは長崎へ向い、高島家にて砲術研究三回、唐館見学、砲台視察と多忙な十三日間の中で、中浜万次郎に面談し、アメリカ事情をも聞いている。事前に万次郎の長崎奉行所から土佐藩に引き渡す日時を知った真吉が、これに長崎行の日程を合わせたのだ。万次郎との対談に彼らも同席させるとは、心憎い教育

表5　嘉永5年（1852）・嘉永6年（1853）江戸での稽古及び試合等（10/6～1/27）

日付	稽古及び試合相手等	備考
10/6	江戸到着	「本郷三丁目伊豆倉横町石山氏ニ投ス、門人笠井吉人昌平橋まで出迎フ」
10/7	稽古	「伴氏及黒原五郎来ル、稽古始ス」
10/8	稽古	「午後稽古」
10/9	稽古	「稽古午前也」
10/10	北辰一刀流　千葉定吉門人 清水小次郎 中尾舛三	「千葉定吉門人清水小次郎并同藩中尾舛三両人試合ニ来ル、小次郎ハ越前人、**頗曲技**也」
10/12～10/25	稽古	
10/26	稽古 本所浅野氏會	
10/27, 28	稽古	
11/2	一刀流　杉浦門人斉藤新二郎	「一刀流杉浦門人斉藤新二郎試合ニ来ル」
11/3	會	
11/4	鏡心明智流　天野将曹門人古賀野春吉	「天野将曹門人古賀野春吉試合ニ来ル」
11/5	會 青山竹田氏ノ會	「會後青山竹田氏ノ會」
11/6	會 浅野氏會	「會後浅野氏會」
11/7	一刀流　杉浦門人	「杉浦氏門人試合ニ来ル」
11/9	一刀流　杉浦	「小日向腹部坂御旗本杉浦氏ヱ試

計画である。長崎を出ると真吉は、博多で遠山晋八と安岡東五郎を拾い、長州萩藩でも交流を続け、その間大砲鋳造、測量、砲台場などの見学と写本に忙しい時を費やしたのち、大坂に至った。大坂の土佐藩邸で佐々木高行と他一名がこの研修に参加、江戸まで共に同行している。そして圧巻は江戸で佐久間象山塾に樋口真吉、佐々木高行、山崎文三郎、桑原介馬が入塾、約一カ月間、佐久間象山から最新の西洋砲術を集中して学んだことである。

★この間遠近晋八らは何をしていたのであろうか？幡多郡誌を見ると江戸で真吉が「安積良斎の門に暦学す」との記事もあるので遠近晋八と安岡東五郎は江戸で安積良斎に学んでいた可能性がある。

真吉らは嘉永六年一月二十七日に江戸を発ち、三月七日中村に帰着、三百一日に及ぶ壮大な講師研修の旅を無事終えている。

「中村市史」では、次のように総括している。

「この行は前三回九州剣道修行にも遥かに増して多数の剣家と交わった許りでなく、それぞれの門下の志士、また学者、趣味の絵画の友との交流をひろげ、殊には砲学、砲術研究を深め得たことなど最大の収穫であり、外には「土佐に樋口あり」の名声を得、内には幡多勤皇党首領の基盤を確立したと言える」としているが、文武館の講師養成の旅だったとの視点に気ずていない。

●嘉永五年の旅は？

この壮大かつ奇想天外な教育計画の全てを企画立案し、幡多奉行と藩庁を動かして予算を確保し、実行した真吉の企画力と行政手腕は見事というしかない。

真吉の優秀さは幡多奉行所の役人として、幡多の郷士と地毛浪人を教育する藩校建設を提案し、実現するまでの準備を周到に行い、十年かけて見事に文武館開業を実現させている点にある。その意味でも嘉永五年の旅は物見遊山の旅であったはずはないのである。

文武館と幕末中村の教育

●教育の成果について下記左「中村市史」の記事で真吉等四名が行余館の講師として「額」に記されていたという。真吉は生涯文武館で教壇に立つ予定であったと思われるが、この人材を土佐藩は放置しなかった。藩校建設の建白書を出し、文武館建設への真吉の努力は幡多奉行からの報告で藩庁も真吉の存在を知ってはいたが、佐々木高行がこの旅に参加したお陰で真吉の生の人物像が具体的に藩庁に報告され、真吉の運命は大きく開かれることになったことは既に述べた。真吉は文武館完成後五年間は教壇に立つなど文武館の運営に従事し、幡多の青年教育に貢献している。

●明治初期であろうか「中村市史」に上記の寺子屋の記事（資料④）があった。塾の主はほとんど真吉の弟子達である。申田元道も亀井塾に学んでおり、中村の学問はそのほとんどが亀井学派になっている。当時八百名を超える子供たちが寺子屋で学んでいたとは、驚愕すべきことではないか。彼らが成長して文武館で学び、明治期に多くの人材が輩出したとされる資料も「中村市史」にある。（右下資料③）

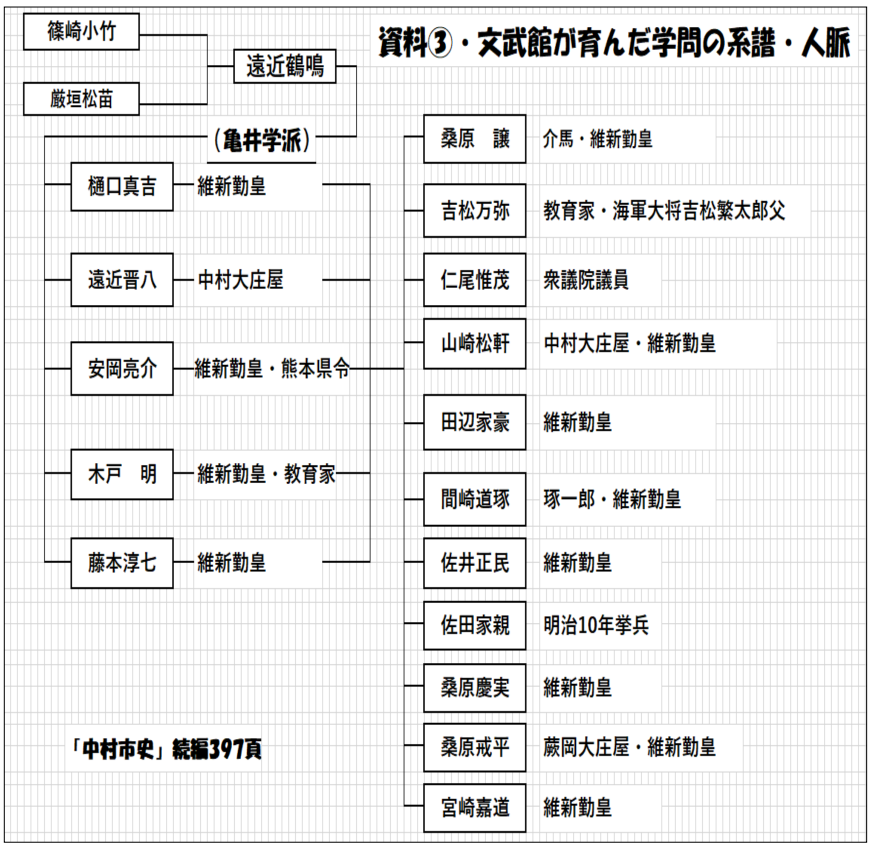
資料④・幕末の中村の寺子屋

名称	所在地	塾主	科目	生徒数	男	女
鶴鳴堂	中村宮田小路	遠近晋八	漢学・作文・詩作	165	150	15
遊蔦堂	中村土居式	木戸　明	漢学・詩文	200	200	
竹窠堂	中村下町	申田元道	読書・算術・作文	176	83	93
習遠堂	中村百笑	宮崎嘉道	読書・算術・作文	97	85	12
菓園堂	実崎村	宮崎小三郎	読書・算術	160	150	10
不詳	横瀬村	喜見寺宣秀	読書	50	50	
				848	718	130

幡多地域の教育に貢献した文武館は、途中から敬止館、行余館と名前を変え、明治五年の学制頒布により行余館は中村小学校になり、現代に至っている。

遠近鶴鳴から教えを受けた樋口真吉が亀井学派を中村に導入し、その学問の系譜は中村に多くの人材を育成したことを示している。

資料③・文武館が育んだ学問の系譜・人脈



「中村市史」412頁

前記の著行余館記事末尾に「但本校に関する二三有名の学士は、則其略伝を掲げて之を左に列記す。」とあって次の四名の略歴があげられている。ここにある学士とは学生ではなくして行余館の指導者と思われる。四名とも市史上巻にあげているので、ここでは各人の特徴のみを左記する。

樋口真吉　中村、幡多勤王党の総帥的中心人物

安岡良亮　中村、幡多の郷士頭的存在。熊本県令。熊本神風連の乱で殉職死

山崎慎六郎　中村、中村大庄屋家、別戸立郷士、幡多砲術界の中心的指導者

桑原譲　蕨岡、幡多勤王党の重鎮の一人。維新後官界入をして邏卒隊総長迄栄進。

412

大神宮に建立された「中村小学校旧校舎跡」記念碑

●ご存知だろうか、文武館の跡地、大神宮の正面大鳥居の左下に「**中村小学校旧校舎跡**」と刻された記念碑ができていた。残念ながらこの碑文に樋口真吉の銘も無ければ文武館の文字もない。確かに公式には文武館は土佐藩が建設したものだから、樋口真吉の銘は表には出てこないのかもしれない。しかし、実質的に文武館の建設に最も貢献した人物こそ樋口真吉であったと言う歴史を語り継いでいく必要があるのではないだろうか。その意味で中村大神宮の境内に「樋口真吉記念碑」か、「文武館建立の経緯を説明する記念碑」を建ててはいかがだろうか。そして中村小学校のルーツとしての「文武館の説明額」を作って、中村小学校の校内に掲示してもらう案もあります。子供に語り継いで行かない限り、四万十市民の頭から歴史の記憶は消え去ってしまうのではないかしみじみ心配している次第です。

第二回樋口真吉杯剣道大会

●**樋口真吉杯剣道大会**十一月三日四万十市武道館に於いて午前九時から第二回樋口真吉杯争奪剣道大会が開催されます。昨年は優勝杯以外に一～三位までの入賞者にはメダルを授与しましたが、本年から中学生も対象にしてメダルを授与することにしました。右ポスターは昨年のものです。豆剣士たちの試合は見ごたえがあり、ぜひご観覧下さい。

●不破八幡宮奉納演武樋口真吉が学んだ大石神影流免許皆伝の森本邦生先生をお招きして総会での講演をお願いしておりますが、翌八日に不破八幡宮境内にて大石神影流演武を奉納致します。その終了後に、大石神影流剣術の体験会をも開催いたします。詳細は右ポスターの通りです。樋口真吉が学んだ剣術の流派の実演を見学できるめったにない機会ですので、マスク着用にてぜひお越しください。

編集後記

●樋口真吉顕彰会総会例年樋口真吉の生誕日十一月八日にちなんで総会を十一月に開催していますが、本年は七日（土）十七時より総会と懇親会を開催する予定です。今回は大石神影流免許皆伝の貫汪館館長・森本邦生先生をお招きして樋口真吉が学んだ剣術に関する講演を予定しておりますのでご期待ください。何分コロナ禍の折から、例年のような宴会の型式は取れませんので、それに代わる形にて懇親会を行う予定です。

●「協賛会員」募集新年度には、顕彰会としてより積極的に活動する為に、運営費用を調達すべく、この運動に協賛する会員を新たに募集していくことを決定しました。その詳細は新年の会報誌にて発表いたしますが、ぜひご協力ください。